

詳しくは入試要項をご覧ください。 <https://www.nanzan-u.ac.jp/grad/admission/>

**一般入学試験**

|          |     |      |
|----------|-----|------|
| 書類審査     | —   | 100点 |
| 基礎知識（筆記） | 90分 | 100点 |
| 外国語（筆記）  | 90分 | 100点 |
| 口述試問     | —   | 100点 |

**社会人入学審査**

|      |     |      |
|------|-----|------|
| 書類審査 | —   | 100点 |
| 小論文  | 90分 | 100点 |
| 口述試問 | —   | 100点 |

**推薦入学審査**

|      |   |      |
|------|---|------|
| 書類審査 | — | 100点 |
| 口述試問 | — | 100点 |

**国内在住外国人入学審査**

|      |     |      |
|------|-----|------|
| 書類審査 | —   | 100点 |
| 小論文  | 90分 | 100点 |
| 口述試問 | —   | 100点 |

博士前期課程のカリキュラム

**【神学領域】**

聖書神学概論  
 組織神学概論  
 諸宗教の神学概論  
 旧約聖書研究  
 新約聖書研究  
 組織神学研究  
 諸宗教の神学研究  
 倫理神学研究  
 実践神学研究

**【哲学領域】**

教父思想研究  
 キリスト教精神史研究  
 キリスト教文化研究  
 古代哲学研究  
 中世哲学研究  
 近世・現代哲学研究

**【宗教学領域】**

宗教史研究  
 宗教学研究  
 宗教社会学研究  
 宗教心理学研究  
 比較宗教学研究  
 宗教哲学研究

専門外国語科目

古典語学（ヘブライ語） 古典語学（ラテン語）  
 古典語学（ギリシャ語） 現代語講読

+ **研究指導** 指導教員のもとで研究・論文執筆

博士後期課程・宗教思想専攻 入試の種別と試験科目

詳しくは入試要項をご覧ください。 <https://www.nanzan-u.ac.jp/grad/admission/>

| 一般入学試験   |     |      |
|----------|-----|------|
| 書類審査     | —   | 100点 |
| 専門領域（筆記） | 90分 | 100点 |
| 外国語（筆記）  | 90分 | 100点 |
| 口述試問     | —   | 100点 |

※ 外国語は2科目

| 社会人入学審査 |   |      |
|---------|---|------|
| 書類審査    | — | 100点 |
| 口述試問    | — | 100点 |

| 国内在住外国人入学審査 |     |      |
|-------------|-----|------|
| 書類審査        | —   | 100点 |
| 小論文         | 90分 | 100点 |
| 口述試問        | —   | 100点 |

博士後期課程のカリキュラム

研究指導 指導教員のもとで研究・論文執筆

+

専門科目

宗教思想特殊研究（神学）  
 宗教思想特殊研究（哲学）  
 宗教思想特殊研究（宗教学）

神学・哲学・宗教学の3領域  
 学問分野どうしの「対話」



博士論文

- テーマ・目的・方法
- 論証の整合性
- 専門的研究能力

伝統の継承 + 独創性

# 在學生と修了者の声

～ 南山大学大学院人間文化研究科キリスト教思想・宗教思想専攻～

本専攻への入学を考えていらっしゃる皆さんに向けて、在學生と修了者からメッセージをよせてもらいました。参考になさってください。2022年3月

---

## 著者たちとのコミュニケーション

---

決して崇高な理由であるとは言えませんが、私が宗教について学ぼうとしたきっかけはホラーゲームでした。ある作品において祭儀と人間というモチーフのもとに物語を展開する作品があり、そこから宗教について関心を持ち、大学・大学院に進学しました。現在は、新約聖書学、並びにこれらの文書を生み出した第二神殿時代のユダヤ教について研究しています。

聖書に限らず文芸作品には、人間を触発する様々なコミュニケーションの可能性が内包されています。たとえば、ある物語の登場人物や詩歌の一部から何かしら生き方やモノの見方について感化された経験がある人は少なくないでしょう。あるいは、逆に相容れない考え方を示唆する文章に出会い、そこから自己を省みたり、省察のうえで文章に批評を加えようと試みる場合もあるでしょう。これらのコミュニケーションはいずれも作品の著者と「私」との関係によって生じるものですが、他方で作品の著者と「私」との間には時間や空間、言語などの隔たりがあることも事実です。

新約聖書は主にキリスト教徒によって読み継がれてきた書物ですが、そこに集録されている文書の大半は、おおよそ2000年前のユダヤ教世界で生きた著者たちによって書かれたとされる書物です。したがって、私たちが新約聖書の著者たちとより深くコミュニケーションを行おうとするには、時として著者たちの生きた当時のユダヤ教的な表現や考え方について注意を払うことも必要になります。私は新約聖書から発せられる使信について、その成立当時におけるユダヤ教からの視点を取り入れることによってどのように捉えられるか、あるいは既存の解釈を捉え直せることが出来るかについての探求を行っています。

大学院の講義では、聖書の思想について討議・探求するゼミのほか、関係する文書を原典から読解する際に必要となる古典語の授業などを中心に履修してい

ます。また、キリスト教思想専攻では在外活動の経験をもつ司祭養成課程の方や、海外出身の神學生と会話することが比較的多いのも特徴です。ひとつの主題や内容に対して様々な視点や文化的背景をもつ方々からの意見をうかがう機会も多く、そのたびに新たな気づきを発見することも少なくありません。

キリスト教思想専攻ではキリスト教神学に限らず、哲学や宗教学を専攻に選ぶこともできます。宗教や思想について探求する営みは、特定の思想や現象についての知見を得られるだけでなく、時には難解な文面や慣れない言語との格闘を試みることも伴います。そして、常に結論に近付ききれない歯痒さとの葛藤に悩まされます。大学院について、研究者を目指す人の専門機関として捉える方も多くいらっしゃるかもしれませんが、しかしながら、有機的に社会の様々な問題に向き合い、またより深く関わるうとするためには、これらの難解さに挑戦し関与する経験を積むことは、研究者に限らず色々なかたちで社会に関わることを目指す人にも決して遠回りとは言いきれない活動なのではないでしょうか。

(K.I. キリスト教思想博士前期課程在学中)

---

## 仏教・キリスト教・宗教間対話

---

どうしてキリスト教を大学院で学ぶのか、何が欲しくてその門戸をたたくのか、ということ、はっきり理解した上で大学院に入学される方というのは、よほど強い意志をもって学者を志されている方でもなければ、少ないのではないかと思います。

実のところを言うと、私は実家が禅宗のお寺で、本来であれば仏教学を学ぶべき立場であるのでしょうかけれども、他方で私の母親はクリスチャンで、幼いころは教会によく連れていかれました。そのような奇縁にあって、禅僧でありながら自分の根っこの部分には、どこか仏教とキリスト教の両方があるように思っています。

私が仏教学でも宗教学でもなく、キリスト教を大学で選んだ理由は、先も言ったようにはっきりとしたものではありませんでした。ただ、人生の成り行きと

して南山大学に入り、また大学院でもう少し勉強を続けてみようか、と思ったのです。ただ、結果としてキリスト教を学ぶことを通して、ある意味で仏教を相対化し、またそれによって、何か有益なものが得られたのではないかと思います。

今日、宗教や学問に拘らず、言論の領域から「絶対性」を排除する傾向があるように思います。仏教の言葉を借りるなら、諸法無我の立場です。そういう意味で、現代社会は仏教的に見え、キリスト教にとっては逆風の時代かもしれません。ですが、キリスト教を学んでみると、その「仏教的なもの」の限界や欠点も見えてきます。そもそも、仏教の歴史を振り返ってみると、「仏教的なもの」以上のものが豊かにあることに気がきます。しかるに、私にとって仏教を相対化するということは、仏教の世界を豊かにし、現代社会における禅僧の生き方を模索する上で、大いに役立っていると思います。

キリスト教思想専攻には、実際に聖職に就かれている先生方や、司祭を志す神学生の方々がおり、また大学に併設される宗教文化研究所では、宗教間対話の研究も盛んに行われています。仏教徒の立場からキリスト教の本音や現実について学びたかった私にとって、これほど恵まれた環境はありません。

私のような特殊な条件下で大学院に入る人は少ないかと思いますが、それほどキリスト教思想専攻の門戸は広く開かれています。大学院では色々なことを学び、議論することができます。これから大学院を志される方は、学問的成果に拘らず、ぜひ自分の生を豊かにする知恵を養っていただければと思います。

(H.T. キリスト教思想専攻博士前期課程修了)

---

## 人生経験と学びの志

---

私は、南山大学大学院の人間文化研究科に 2015 年 4 月から 2 年間在籍し、キリスト教思想を専攻しました。私が大学院に入学した動機は、アウグスティヌスの研究がしたいと思ったからです。彼は西洋思想の父と呼ばれ、キリスト教思想に多大な影響を与えた神学者です。修士論文のテーマは、「アウグスティヌスの恩恵論」です。

大学院では、研究室が与えられ、自由に研究する環境が整っています。研究室は図書館と渡り廊下で直結していて、いつでも参考文献を調べることができます。

た。図書館にはアウグスティヌスの著作が豊富に揃っており、研究書も充実しています。原典にあたり、難解なラテン語と格闘して彼の思想の真髄を探り求め、ついにその核心に近づいたとき、学究することの喜びを感じることができました。

世界はグローバル化が推し進められています。その一方、国や民族によって価値観が異なり、様々な紛争が起こっているのも事実です。このような世界状況を理解する上で、宗教は大きな鍵を握っています。また、2020 年から続いているパンデミックは、人々に生き方や価値観の変革を促しています。「人はどこから来て、どこへ行くのか。生きる目的は何か」、あるいは「人間にとって真に価値あるものは何か」という私たちが生きる上での根本的な問いの答えを人々は求めています。大学院の学びの中で、この問いの答えの糸口がきっと見つかることでしょう。

私は、結婚・子育て・介護を終えて人生がひと段落した後、大学院での学問研究を志しました。様々な人生経験の中で、本当に学びたいことに出会ったからです。「学びたい」という志のある人に門戸は開かれています。南山大学大学院は「学びたい」というあなたの思いを大切に、応援してくれます。学びたいと思った時が学ぶ時、あなたも真理の探求へと漕ぎ出しましょう。アウグスティヌスは真理の光の中に生き方を求め、「最高善を楽しむ人こそ幸福な人である」と語っています。南山大学大学院は、真理と最高善を探究する絶好の場を提供します。あなたも南山大学大学院で学んでみませんか。

(K.N. キリスト教思想専攻博士前期課程修了)

---

## 計画を立てることの大切さ

---

私はインドネシア出身で 2010 年に来日した後、約 2 年間南山大学別科で日本語を学びました。2013 年に南山大学のキリスト教学科の 3 年次に編入しました。2015 年に南山大学を卒業した後、南山大学大学院のキリスト教思想専攻に入学しました。

大学院受験のきっかけが二つあります。ひとつめは神学に対する研究に興味があること、もうひとつは司祭として働くために幅広い知識が必要だと思ったことです。私が大学院の研究で重要だと考えることは「計画」です。ひとつめの計画は、どんなことについて研究するかを決めることです。二つめの計画は、限

られた時間の中で課題や論文をいつ書き終わらせるかを考えることです。計画は基準みたいに自分の熱心さを計ることができると言えます。

少し研究テーマを紹介させていただきます。私は「三位一体論における相互愛モデル——ダビド・コフィーの見解の考察」というテーマで修士論文を書きました。コフィーは聖書と伝承にもとづいて、「相互愛モデル」を発展させます。彼は父に対する子の愛と子に対する父の愛を証明するために、最初は「授与モデル」という呼び名を用いましたが、後に「リターン（返還・帰還）モデル」という呼び名を用いるようになったのです。その背後にある意図は、子ないし聖霊の父へ向かう動きを説明することです。この「リターンモデル」という呼称は、伝統的な「発出モデル」と比較するならば、一見するとまさに正反対の方向の動きの呼び名ということができるでしょう。「リターンモデル」は、父から遣わされているイエスが聖霊の力の内に自分の生と死をとおして父へと帰るといふ、すべてのプロセスを包み込むと強調しています。この研究の最終的な目的は、「発出モデル」と「リターンモデル」という呼び名は実際に「父と子の相互愛」を示すことを証明することです。

私にとって南山大学の大学院で学んだこと、研究したことは今のローマでの勉強でも役にたっています。たとえば、早めに研究と勉強の「計画」を立てることです。勉強の面だけではなく、日常生活を送る中でも、「計画」が必要です。私は南山大学の大学院で様々なことを学ぶことができました。神学に対する知識を得られるだけでなく、人間関係や他者とのコミュニケーションなども学ぶことができました。

(A.A.D. キリスト教思想専攻博士前期課程修了)

---

## 真理探究の原経験

---

南山大学大学院人間文化研究科は、私にとって、生涯にわたり真理を探究するための大切な学問的基礎を築くことができた場所でした。

住み慣れた東京での大学生活を終えた私は、いったん東京から離れた地で、哲学を基礎から本格的に研究できる進学先を探していました。南山大学の充実した教育環境は私のこの希望に最大限応えてくれるものであり、古代から現代までのキリスト教思想と西洋哲学を幅広く学ぶことができました。修士論文では自分

自身の問題であった「日本人とキリスト教」に光を当てるために、明治以来東西文化がせめぎ合う中で独自の思想を展開した西田幾多郎の意志論をテーマとしました。

南山大学大学院で学んで良かったことが大きく三つあります。ひとつは、神学・哲学・宗教学の三分野をバランスよく学ぶことができた点です。一般に大学院は「専門」を徹底的に極めるための場所ですが、南山大学では複数の学問的視点からひとつの専門を総合的に掘りさげることを可能にするカリキュラムがあります。国内外で活躍されている各分野のエキスパートの先生方にご指導いただけることも大きな魅力です。

二つめは、これら三つの分野ごとに多様な研究テーマに取り組む大学院生同士の交流ができたことです。一見当たり前のように思われるかもしれませんが、同じ専攻に所属していながら異分野の研究に取り組んでいる仲間と出会い交流できることは、自分自身の専門を極める上で非常に大切なことであり、とくに大学院修了後も研究を続けたい人にとってかけがえのない財産になります。

最後に、和漢・洋書合わせて数十万冊の蔵書がある「南山大学図書館」が研究を質量ともにサポートしてくれたことです。自然科学や社会科学が対象とするフィールドとは異なり、人文学のフィールドはまさに「本」（テキスト）であるといっても過言ではありませんが、この点、南山の図書館の充実さは群を抜いており、人文学研究の多様な可能性を広げてくれます。

南山大学大学院修了後は、一般社会人として働きながら、別の大学の博士課程に進学し、仕事（教育）と研究（教育哲学）の両立を目指してきました。仕事と研究を続ける中で、いつも思い出されるのは、南山大学で仲間と共に真理を探究した原経験でした。いまなお私は、南山大学大学院で学んだことをたゆみなく学び続ける人生を歩んでいます。

(G.T. キリスト教思想専攻博士前期課程修了)

---

## カトリック学校と宗教教育

---

私は南山短期大学在学中に、カトリックの学校で宗教科の教員になりたいという夢を抱き、宗教科の教員免許はキリスト教学科で取得可能なことを知り、3年次に編入をしました。しかしいざ編入をすると、通常

4年間かけて行う教職課程も編入して2年間では余裕もなく、日本国憲法、体育などを含めた教職科目の履修が主となり、学科科目を中心に専門的に神学を学ぶには不十分であると感じました。そのため、学部卒業後に大学院に進学し、大学院の研究と並行して教職課程を継続しながら神学と教育の両分野をより深める道を選びました。

研究内容は修士課程修了後に宗教教育に携わることが大前提であったので、「日本におけるカトリック学校の福音化——宗教教育を通して」というテーマで研究をしました。日本のカトリック修道会が経営するカトリック学校では、学校全体でキリスト教行事に取り組み、宗教科の授業が公立学校の道徳の授業に代わって行われます。生徒の大半がキリスト者ではない環境、それもそれぞれの家の諸宗教が混在する環境のもとでキリスト教精神による宗教教育を行うということ、カトリック学校の使命、そしてそこで働く修道者と信徒のキリスト者としての使命は何かを明確にすること、福音化されたカトリック学校を築き上げるためヴィジョンをもち、課題を提示することが不可欠であると感じ、このテーマでの研究に励みました。

日々のゼミでの研究発表、そしてキリスト教思想専攻の学生と教員すべてを集めて行われる研究中間発表で、様々な分野からの疑問点やコメントをもとに深めるべき部分や不十分な部分を明確にし研究に取り組んだことは研究を富ませる大きな機会となりました。また、研究を進めながら宗教科と社会科の教職課程の勉強をしていたことは、現場に立つ教員による教育法の授業や教育実習などを通して今日の日本におけるカトリック学校の具体的な状況を体験し、研究を進める上でとても重要な過程でもありました。

私は在学中にアルバイトとして学内の教職センターでのTA、そして南山大学附属小学校のTAをしていたので、アルバイトを通して教育に関わり、ミッションスクール、特に南山学園における宗教教育の取り組みについて、私たちが共通して持っている「人間の尊厳のために」というモットーのもとで体験できたことも研究を進める上で有益な体験だったと思います。研究の傍ら、どのように学生生活を送るかも、ひとつの鍵となるのではないかと思います。

(M.K. キリスト教思想専攻博士前期課程修了)

---

## テキストに向き合う演習の思い出

---

南山大学を卒業後、大学院へ進学し、2011年より北海道の大学に奉職しています。大学院在学時には、トマス・アクィナスやボナヴェントゥラといった西洋中世の哲学者の研究を行い、いまでもその研究に取り組んでいます。

大学院時代でもっとも記憶に残っているのは毎週行われていた演習の授業です。大学院において、修士あるいは博士の各課程を修了する上で求められる単位数は学部のそれよりも遥かに少ないため、その分、多くの時間をかけて予習を行い、ひとつひとつの授業に臨むこととなります。私の専門は西洋中世哲学なのですが、履修した演習は個々の哲学者のテキストを、丹念に時間をかけて読み解いていくという形式のものでした。大学院生に割り当てられた共同研究室で自分の勉強を行うと共に、テキストを読み、先行研究を整理しつつ演習に備えるという毎日でしたが、そうした日々の記憶を思い起こしてみると、当時の自分の読みの浅さや不勉強を恥ずかしく思う一方で、テキストの内に自分を沈め、そこで述べられていることにひたすら向き合う時間は刺激的なものでした。

南山大学の大学院は、キリスト教をはじめとする諸宗教や哲学を学ぶ上で充実した環境だと思います。上記の諸学問に関するこれまでの学問的な伝統に加えて、各分野を覆う幅広い専門のスタッフが揃えられ、大学付属の図書館や宗教文化研究所、神言神学院の図書室には書籍、学術誌を問わず豊富な文献が所蔵されています。私の在学時には、貸し出しカードの付いた図書が図書館の書庫にまだ残っていたのですが、国分敬治や澤潟久敬、井上紫電、稲垣良典、Leo Elders（各敬称略）といった名前が時折そこに書かれているのを見かけ、そうした先生方がどのような関心と共にそれらの本を読まれたのかを考えることも楽しかった記憶があります。

学部から大学院への進学を考えているという場合には、同期とは異なる道を歩むことに不安を感じる方もいるかもしれません。ですが、そこには自分と関心を共にしつつも互いに切磋琢磨する仲間との出会いがあり、また、日々の研鑽を通じて得られる大きな知的喜びがあります。大学院で過ごす時間がよいものになられることを祈念します。

(R.M. 宗教思想専攻博士後期課程修了)